

お久しぶりです。前回から2か月近く経ってしまいました。いやいや、決して遊んでいたわけではありません。それどころか、取りくんだ課題の大きさに四苦八苦・思案投げ首・千辛万苦していました(それほどのことでもないか …)。その「課題」について書いてある二十冊余の本を調べていました。読めば読むほど「これも書かなきゃ」「この人のことも参考になる」… など、大切な箇所、人物が次々と見つかってしまい、それらをどうまとめていくか頭の中が大混乱。そんなわけで今ごろになってしまいました。

「課題」についてお話する前に、ちょっと横道にそれます。この春から保育園の年長組になった孫・そうちゃんは、保育園を終えると両親の仕事が終わるまでふたりの妹と我が家に寄るのですが、このところ毎日わたしが録画しておいた「生命誕生 母と子」(NHKスペシャル〈人体〉神秘のネットワーク 6)を見ています。受精卵が細胞分裂後、まず心臓ができ、そこから「メッセージ物質」がでて、次から次へと臓器ができたり、胎盤にある「恵みの窓」から母親の血中にある酸素や栄養が送られ、赤ちゃんは「いのちの木」からそれをとりいれ… という、大人向けの番組です。むずかしいことばがでてくると質問しながら、真剣に集中して見えています。もうすこしで6歳になる幼児とは思えないほどです。この〈人体〉の神秘をテーマにしたシリーズは、私たちの「いのち」は「人間」ではなく、「Something great (なにか偉大なるもの)」の手によってつくられるものだ — ということを確信させてくれました。私たちキリスト者は「サムシング」ではなく、それは「神さま」であると信じています。

神さまからの「恵み」としか言いようのない「いのち」を与えられた人間が住むこの世界。天地創造のはじめ、神さまはまず「光」をお創りになって『神は光を見て、良しとされた。』(『創世記』1章-4節)といひます。そのあと大地や海(1-10)、草や木々(1-12)、昼と夜(1-18)、魚や鳥(1-21)、動物などをつくった(1-31)ときにも「良しとされた」という言葉がくり返されます。そして、すべてのものをご覧になった神さまは、『極めて良かった』とされました。

しかし今、私たちが住む世界はどんな状態でしょう。戦争、紛争、テロ、人種差別、少数者への差別、理不尽な暴力やいじめ、子どもへの虐待、… 数え上げたらキリがない「悪」や「罪」。それがもたらした悲しみ苦しみがあふれています。

## ♣ 神さま、なぜあなたが創った世界に「悪」があるのですか？ (1)

そのように考えると当然、私たちは次のような疑問をもちます。「もし神さまがこの世界を創ったのなら、どうしてこの世界はこんなに苦しく悲しいことが多いのか。」「もし神さまが人間を創ったのなら、どうしていわれもなき不幸が善人を襲うのか?」。さらに、「神さまが全知全能であるのなら、この世になぜ悪があるのか? また、なぜ悪を知りながら見過ごされるのか?」。この問いは人間がこの世に誕生して以来、これまでずっと問われ続けてきた問いでもあります。

### 「神義論(弁神論)」について

これらの難問に対するキリスト教からの回答は、「(苦難の)神義論(あるいは弁神論)」と呼ばれます。さあこれが「超難問」なのです。多くの教父(1世紀末～8世紀頃までの古代・中世キリスト教会で正統的信仰を伝え著し、自らも聖なる生活を生きたと認められた人たち)や哲学者、神学者たちがこの問題に取

り組みました。だれの回答を読んでもむずかしいです。二人の哲人の考えをご紹介します。

▶ **アウグスティヌス** (Aurelius Augustinus 354-430)

ラテン教父の伝統にあって最大の神学者・哲学者といわれます。あの「三位一体」論(第56、57回参照)を確立した人です。彼は『私は若かったころ、恐るべき快樂によって満足を得ようと燃え立ち、荒々しい様々な暗い愛欲にふけり、恥ずかしいとも思わなかった』と自著『告白録』(わたしは最後まで読んでいません…。『神の国』も同様。)で書いているように放蕩生活を送ったこともありました。キルケゴール(デンマークの哲学者。第22回参照)もそうでした。よくよく考えると、わたしの尊敬する先人(哲学者)は、なぜか女性に溺れる青春時代を経験している人が多いような気がします。えっ? わたしですか? 「放蕩生活」なんてしませんでした。が、「金欠生活」はたびたびでした。それはともかく、アウグスティヌスは人生の途上でたくさんの友、師と出会い、『愛と真実を求め続け、その時代の中で自らの体験を神と人間との関係で見つめつつ生き、思想を形成していった』(宮谷宣史氏)といえます。

彼は、「世界の中の限られた一部分に悪と映る事がらも、世界全体の調和のうちにあっては善である」と考えました。「存在するものはすべて神によって創造されたゆえに善である。では、なぜ悪があるのか — 悪は「悪自体」としては存在しない。悪は「善の欠如」、あるいは「悪用された善」とみなされる。悪の起源は神ではない。では、なぜ悪は生じたか。悪の起源は人間の自由意志の中にある」 — といえます。この「自由意志」こそ、この問題を解くキーワードのひとつです!(後日詳しくお話します。)

さらに加えて、人間は「善なる存在」でしたが「〈アダムの墮罪〉(第51回参照)によってその罪がすべての人間におよび、その後、人間は罪を犯さないで生きることができなくなった。人間はよい事をやろうと思ってもすることができず、逆に欲しない悪い事をしてしまう。人間は自分の力でよい事をしたり、救いのための行いをする事ができない。〈神の恵み(アウグスティヌスはこれを「恩寵」という言葉で表します)〉だけが人間を救うのだ」 — と説いています。

▶ **ヘーゲル** (Georg Wilhelm Friedrich Hegel 1770-1831)

ドイツの哲学者で、『精神現象学』、『大論理学』、『歴史哲学』などを著しています。カントに始まり、フィヒテやシェリングを経て、「ドイツ観念論」を完成した人物と言われます。みなさんもヘーゲルの「弁証法」を高校・大学時代に学んだ記憶があるのではないのでしょうか。あるものが生まれ(正)、他のものと対立し(反)、二つの対立と矛盾が原動力となって、それらがより高い次元のものに統合される動き(合)を通して、真理が明らかになる生成と発展の論理をいいます。わかりやすく言うと、Aさんの主張は、それに矛盾・対立するBさんの主張が現れたことによって、Bさんの主張を取り入れてその欠点を補い、より良いCという主張になります。ヘーゲルはすべてのものは自己と矛盾・対立するものと出会い、それを自己の中に拾い上げる(aufheben 止揚する)ことによって、より良いもの・高次のものに発展するのだ — といえます。高2の「倫理」の授業でこの説を教わって、「なるほど。ヘーゲルさんって、すげえなあ!」と感心したのを覚えています。大学でさらにヘーゲル哲学について学ぶと、この考えにもいくつか欠点があることを知り、「深いなあ!」と驚嘆して、ますます哲学に夢中になりました。なつかしい!

それはともかく、「悪」については、「歴史上の諸悪も理性の実現にとって必要だった」という彼の言葉があります。弁証法の考え方に沿えば、「善(正)」の矛盾・対立するものとしての「悪(反)」があり、それが「止揚」されて、「理性的なもの」が「歴史」の必然性を実現するといえます。(ヘーゲルの哲学については、「自由」「理性」「絶対精神」などについて触れる必要がありますが、ここでは取りあ

げませんのでご了承ください。)

二人の説を読んで、わたし(みなさん)は次のような疑問をいただきます。

- ☞ 「善の欠如」、「悪用された善」って、どういうことなの？
- ☞ 「アダムの墮罪」＝アダムが神さまから「決して食べてはならない」と命令された「善悪の知識の木」の果実を食べてしまった罪(悪)を、なぜ後世の私たちが引き受けなければならないの？
- ☞ 神さまは人間を「神の似姿」に創ったはずなのに、どうしてアダムとエバは約束を破ってしまったの？
- ☞ 「正」と「反」が止揚されて、「より良いもの・高次なもの」になるなら、なぜ世界に争いが絶えず、人間は相変わらずバカやってるの？ 等々。

「もし神さまが存在し世界を創ったとすれば、なぜこんなにたくさんの苦しみや哀しみがあるの？」という疑問については第19回で『創世記』の第1章を取りあげ、森一弘師の「悪」についての考え方をご紹介しました。『わたしが・棄てた・女』の主人公・森田ミツがハンセン病だと診断されたときの話です。ミツは心の中で「なぜあたしがこんなに苦しまなければならないのか」、「なぜ自分だけがこんなにつらく、不幸でなければならないのか」…。それは持って行き場のない絶望的な問いでした。町工場で一先けんめいに働き、休日は友だちと映画を観たり、買い物をしたりという平凡な生活を送っていたミツ。そして、吉岡さんという大学生と知り合い、やっとめぐってきた胸がときめく日々。それが「ハンセン病」という病によってすべてを失ったと彼女は思ってしまった — という場面でした。

悪の問題は「神の問題」ではなく「人間の問題」であり、聖書は人間の苦しみと悪の問題を「人間の自由と責任という観点」からとらえようとしていること。また、神さまが創られた世界の秩序と調和を破壊するのは「人間のエゴイズム」、「欲望」に他ならないと森師は書いていました。このことについてさらに考えていきましょう。

来住英俊きしひでとし神父は、世界と人間の苦難を二つにわけて論じる必要があると言います。

### 「自然の悪」について

一つは「自然がもたらす悪」。自然災害や疾病などです。来住神父はこれを『悪と言ってよいのかどうか分かりませんが、そう呼ばれます』と書いています。「人間に苦悩をもたらす」という意味で、ここでは「悪」という言葉を使う — と解釈して話をすすめましょう。(第21回で「苦しみはどこから…」というテーマで「自然がもたらす苦しみ」についてすこし触れました。) まず、二万人もの犠牲者を出した2011年3月の東日本大震災について、もう一度考えてみましょう。

#### ▶ 「人生そのものが不条理だ」

この『塾』に多大なる貢献をしてくださっている山浦玄嗣はるつぐ先生の『「なぜ」と問わない 3.11後を生きる』という本があります。岩手県大船渡市も大きな被害を受けました。このとき先生にテレビ局や新聞社などのインタビューが殺到したそうです。「東北の人たちはこんな災害にあっても我慢強く、黙々と耐えている。善良な人たちである」と前置きしてから、「こんな実直で勤勉な人たちが、なぜこんな目に遭わなければならないのか。神さまはいったいなぜこんなむごい事に遭わせるのか。信仰者としてどう思いますか」という質問ばかりだったといいます。

先生は書いておられます。「そんなことは夢にも考えたこともなく、腹が立った」と。先生は惨害のさなかでも何千人という気仙の人たちを診察しました。そして、夫を亡くし、妻を亡くし、子どもを亡くし、親を亡くした人たちと一緒に泣いたそうです。でも、『なして、おらァこんな目

に遭わねアばならねアんだべ」という恨み言を聞いたことはただの一度もない。』と語気を強めます。気仙の方たちはキリスト教徒は少ないけれど、熱心な仏教徒がいらっしやるとのこと。この方々も「なんで阿弥陀仏様は我々をこんな目に遭わせるのか」とか「どうしてお地藏さまは助けてくれなかったんだ」なんて『ばかなことを言う気仙衆』は一人もいなかったそうです。そんな気仙の人たちに「なぜ神さまや仏さまは、こんなむごい目に …」と問うことは『極めて悪質』であり、『お前さんたちの拜んでいる神さまは、仏さまは何やってんだ』、『お前たちの信心はなんだったんだ』と言っているのにほかならないといえます。被災者の方々は満身創痍であり、心も体も傷だらけなのに、その傷に塩をすり込むような意地の悪い質問であり、『髪の毛が逆立つぐらい腹が立』ったと被災者のお一人でもある先生は書いています。その後、「がんばろう日本」・「がんばろう東北」という文字や言葉が日本中に飛びかいました。あのメッセージがどれほど被災地の方々の心をさらに痛めつけるものであったかを感じていた人はどれほどいたでしょう？（東京の某ドーム球場のバックネット下のフェンスには、いまだに「がんばろう日本」の文字が掲げられています！ 4月現在。）

山浦先生は、この大震災が起きたことを「不条理」と捉える向きもあったけれど、そもそも「生そのものが不条理である」と言います。魚は人間に食べられるために捕まります。豚も、牛も、鶏も人間に大切に飼育されますが、ある日エサがもらえらると思っけて近寄ったら屠られてしまいます。『人間だけ、そうした不条理にまったく遭わないという道理は通用し』ないのです。死なない人は一人もいません。大地震で一度に二万人もの命が奪われたから「不条理さ」をよけい感じてしまいます。地震だけではありません。台風や水害、津波などによる多くの死は世界中に見られます。『人生というものの自体が災害の連続』だと先生は指摘します。気仙地方はほぼ 40 年に一回は大津波が来て、人口の一割か二割がさらっていかれるそうです。それは『当たり前のこと』であり、『なぜ』と問うこと自体に意味がない』とされます。「なぜ善良な人たちが …」と言うのは「悪いヤツは死んでもかまわない」と言っているのと同じです。くり返しになりますが、神さまは私たちの「都合」で動くのではありません。私たちはあくまでも神さまの「道具」と考えるのがキリスト者です。記者たちが言う「信仰」は、「神さまや仏さまを自分たちの都合のいい道具にしようとする信仰」だと先生は書いています。

## ▶大震災は「天罰」か!?

あの震災で出てきた問題として、「天罰論」がありました。石原慎太郎東京都知事(当時)は「津波をうまく利用して、我欲をうまく洗い流す必要がある。積年にたまった日本人の心の垢を。これはやっぱり天罰と思う」と語り、問題になりました。彼はそれ以前にも、2007年の能登半島地震(最大震度6)のときは「ああいう田舎ならいいんです」と言い、重度のハンディキャップがある方々を治療する病院の視察後に「ああいう人ってのは人格あるのかね」と言い放つなど、その人格を疑わざるを得ない発言をくり返したのを覚えていらっしやる方も多いでしょう。

資料探しをしていたら、何と！ 内村鑑三師も関東大震災(1923年)後、『天災と天罰及び天恵』という文章の中で、地震は天災、すなわち天然の出来事であり、何の不思議もない。地震に正義も道徳もないと語ったあと、

『然し乍ら無道德の天然の出来事は之に遭ふ人に由つて、恩恵にもなり又刑罰にもなるのであります。そして地震以前の東京市民は著るしく墮落して居りました故に、今回の出来事が適當なる天罰として、彼等に由て感ぜらるゝのであります。(中略) 私共は其犠牲と成りし無辜幾万の為に泣きます。然れども彼等は国民全体の罪を償はん為に死んだのであります。(中略) 大地震に由り』

て日本の天地は一掃されました。(中略) 払ひし代償は莫大でありました。然し挽回した者は国民の良心であります。之に由りて旧き日本に於いて道徳が復たたび重んぜらるゝに至りました。新日本の建設は茲に始まらんとして居ます。私は帝都の荒廃を目撃しながら涙の内に日本国万歳を唱へます。』と書いているのです。

この文を荒井 献先生は、『3. 11 以後とキリスト教』の中で『墮落した、不道徳極まる日本のあの時代の一般体制としては「天罰」、しかし罪のない無辜の民には「天恵」というふうに分けて使われている印象をもった』と受けとります。対談相手である高橋哲哉先生(東京大学大学院総合文化研究科教授)は、『墮落に対する罪ならば、どうして「無辜の民」が犠牲になり、墮落の極みである政治家、財界人、文化人が生き残るのかわからない』と疑問を投げかけます。さらに、「井戸に毒薬を投げ入れた」という流言飛語によって虐殺された多数の朝鮮の人たちの死は、どう考えても墮落した日本人への罪だとか、日本を救うための「天恵」とは言えないとされます。

では、石原氏と内村師が「天罰」という言葉を用いた「根拠」は同じかといえ、まったく違います。キリスト教に関しては「無教会キリスト教」からスタートしたわたしにとって、この違いを明らかにしなくては内村師と無教会の友人に合わす顔がありません。石原氏の「天」からの罰は、「因果応報」的な考え方に基づいています。イエスが打破した古代ユダヤ教の律法学者やファリサイ派の主張でした。一方、内村師が「天罰」として受け止める背景にはキリスト教的な「犠牲」の観念があります。高橋先生は、『十字架のキリストについての内村の信仰上ないし神学上の解釈が存在し』、それは『キリスト教の贖罪論そのものの問題性にもつながっていくのではないか』といます。

「贖罪論」とは、「イエスが十字架にかかって犠牲の死を遂げることによって人類の罪を償い、救いをもたらした」という教義のことです(第 51、52 回参照)。高橋先生は内村師の贖罪論解釈を読むと、「十字架刑は神さまの怒りによる厳罰である」ことが強調されているといます。すなわち、人間が神さまから離反した罪は重いものだから、イエスがそれを一身に背負って十字架上で死刑になるほかには清算されません。厳しい罰を受けることが「赦し」の前提になるわけです。神は「怒りの神」・「裁く神」でもあるということです。贖罪のためには死に至る罰を受けなければなりません。そのあとの「赦し」こそ「神の愛」、「神の恵み」であり、「厳罰即恩恵」になります。また、なぜ「天恵」という言葉を用いられたかということ、「無辜の人たちは罪の贖いとして亡くなってくれたのであり、彼らによって私たちは生かされている」という内村師の信仰上の解釈があります。この本ではこのあと、師の考え方の問題点が展開されています(これについては、後日触れようと思います)。

〈神秘〉としか言いようのない「いのち」を私たちに与えてくださった神さま。私たちはそのいのちを大切にしていかなければなりません。十字架上のイエスの死と復活の意味をくり返し思い起こしながら、世界や人生にもたらされる苦難を受けとめることができますように。「自然の悪」については、次号につづきます。

(2018.04.25.)

【引用・参考にした書籍など】 ・大貫隆 他 編 『岩波 キリスト教辞典』

- ・山浦玄嗣 『「なぜ」と問わない 3. 11 後を生きる』(日本キリスト教団出版局 TOMO セレクト、2012)
- ・内村鑑三 『内村鑑三全集 28』(岩波書店、1983) ・新共同訳 『聖書』
- ・来住英俊 『『ふしぎなキリスト教』と対話する』(春秋社、2013)
- ・荒井 献、本田哲郎、高橋哲哉 『3・11 以後とキリスト教』(ぶねうま舎、2013)
- ・森 一弘 『キリスト入門 Q&A』 ・宮谷宣史 『アウグスティヌス』(清水書院「人と思想 39」、2013)